第378号 昭和51年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和51年（1976年）
12月号（No. 378）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

高頭仁兵衛と深沢村
（久保田　全）……（1）
マナリー峰初登頂（1976年）
（増田圭次）……（2）
明治初期の日本における外国人の
登山活動について（3）
（水野　勉）……（4）
図書紹介
低山高蹤……（3）
ヒマラヤ・トレッキング……（3）
ネパール・パキスタン・ヒマラヤ
トレッキング……（4）
山とパイプの人
――藤島さんを追想して――
（柿原謙一）……（5）
足立源一郎さんの思い出
（月原俊二）……（6）
自然保護情報
冬山登山のゴミが山を汚す
（三上博民）……（6）
祝瓶山（高橋憲二）……（8）
会員通信・集会報告……（8），（9），（10）
会務報告・ルーム日誌など…（10），（11）
カット／松本慎太郎・谷アユ子

高頭仁兵衛と深沢村

久保田　全

（一）

わが国登山界に巨歩を印した高頭仁兵衛が長岡市深沢町（旧三島郡深才村深沢）の自邸で長逝されてから、十八年の歳月が流れた。

昭和四年九月発行の『深才郷土誌』（発行所、三島郡深才村役場）という刊行物がある。本郷土誌の資料を参照しながら、郷土における高頭仁兵衛の一側面に触れてみたい。高頭は『御国の咄し』の中で「村長や助役はさておきまして、村会議員にさえも推された事がありませんし、銀行や、会社の重役になりました事もありません。（略）」と言っている。しかし、深沢の旦那様高頭は、封建色の強い村落共同体のなかでそれなりの啓蒙的役割を果たしているのである。

『深才郷土史』はその「人物」の項で高頭について次のように記している。「（前略）今日吾人を始め一般社会の敬服に堪へざるは其身を奉ずる極めて質素、而も推譲の徳に至っては彼の山嶽誌の編纂には財産の幾分を蕩尽して吝まず、山岳会の費途としては年々尠からざる負担を顧みざるにて知るべし、況や一般家計とは劃然たる限界を立て、数多き書画骨董の幾分づつを売却して之に充つる等は君にして初めて実行するを得ることなりとす。」

明治三十三年（一九〇〇）、地主、小作間の円満な融和と農村の振興を目指して「産業組合法」が公布される。翌三十四年、高頭は深沢信用組合を創設した。肥料ならびに商工業資金の調達、家政の援護等を内容として、高頭家の小作関係者だけで組織された無限責任の経営形態をとる組合であった。組合運営のための備品消耗費、役員報酬等は全く高頭の篤志によるものであった。この組合のため、高頭は約二十年間自宅の一部を無料で貸与し、後に事務所を組合に寄付したのである。

明治四十一年は、烏水らと白峰三山を縦走した年である。この年、新潟県の移出米検査制度に反対して、県下農民運動の草分けである小作人組合が下越地区を中心に結成される。十月、戊申詔書の発布を機として、高頭は深沢自彊会を組織する。会の目的とするところは、①民風の作興、②産業の振興、③教育、村治の改善などであった。自彊会は、養蚕品評会、農事講話会、真綿講習会、風紀改善の建議等を続けながら、大正六年（一九一七）、初期の目的を達して中止された。なお、年に一、二回、諸名士を招いて大講演会を催し、社会の進運に遅れないように努めた、という。

ここで興味あることは、「就中伊藤一隆（日本石油会社技師）、志賀重昂両氏を聘せし時の如きは遠近争って参聴し、聴衆六百以上に及べり。」（『深才郷土誌』）という記述である。『日本山嶽志』刊行の経過からすれば、高頭が志賀を招致したことは十分考えられる。志賀重昂が深沢を訪問したのは何年で、どんな講演をしたのであろうか。今のところ詳細は不明である。

高頭はこのほかに、深沢婦人会の顧問を務めたり、深沢小学校新築の際は、自家修築用に貯蔵しておいたケヤキ、ヒノキの用材をすべて寄付したりしている。大正四年、深沢図書館を創立し、その運営資金と蔵書一千三百冊を寄贈した。『日本太陽暦年表』の扉に、「謹んで此書を深沢神社の祭典費に奉る」と記されていることは周知の通りである。高頭家庭前の小丘に立つ頌徳碑がよく高頭仁兵衛の名望を物語っている。

（二）

昭和五十一年八月十七日午後、小千谷から片貝を経由し来迎寺着。信越線の与板街道踏切を渡り、稲穂が重くたれさがった田園の中の一本道を深沢町へと向かう。濁流を集めた渋海川が岸を洗って流れ、東方はるか金倉山のなだらかな稜線が美しい。この日、上越国境の空は厚い雨雲に蔽われて、秀麗な越後三山はついにその姿を現してくれなかった。町の入口から望まれる亭々たる松並木は、そこが高頭家の屋敷跡であることを示している。

まず、高頭家跡の背後にある正林寺を訪れる。山の仁兵衛を含めて高頭家代々の霊はここに眠っているのである。寺の左側が墓所で、高頭家の墓は墓石上部に家紋

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

が彫られ、ただ「高頭墓」とだけ刻まれた簡素なものであった。旧盆の花がきれいに飾ってあり、蝉がしきりに鳴いていた。

次に高頭家居宅跡をたずねる。家屋が取り壊されて数年になろう。うっそうたる樹々に囲まれたその一角は、全くの静寂が支配している。やぶを分けて屋敷へ入り込んでみる。ススキ、イタドリ、ヨモギ、紫紅色の花をつけて地をはうクズのつる等、夏草の繁茂は甚しく、すさまじい密やぶを形成している。堀の跡には一面のガマが群生し、所々に蓮の花が見られる。大小の石が散らばっているのは、かつての庭石であろう。敷地をとりまくスギ、ケヤキ、ナラ、ホオ、クルミなどの高木群は、かつて翠松館と名付け、旅館「山岳」と称した宏壮な邸宅をしのばせるに十分であった。令弟得五郎氏の住居も既に無いが、これらの土地自体は現在も高頭家の所有となっていると正林寺の住職は語ってくれた。

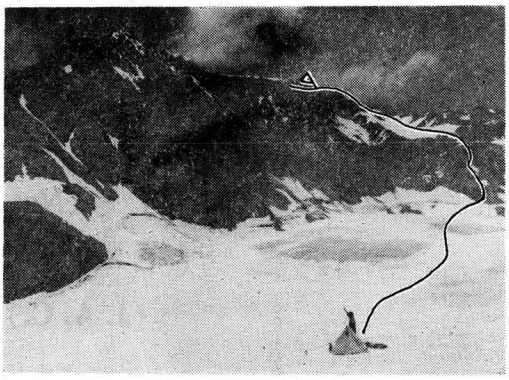
庭前の苗字塚は七メートル四方くらいの小丘であった。ここに「頌徳　几翁高頭仁兵衛氏之碑」が建っている。碑の裏面に刻まれた銘文を見よう。「高頭仁兵衛氏ハ明治十年五月廿日深沢村ノ名門ニ生ル　長ジテ三島中洲先生ノ塾ニ学ビ深沢校ヲ創立セル父義宗氏ノ遺志ヲ継ギ教育ノ振興ニ力ムル外信用組合耕地整理組合等ヲ組織シ郷土ノ産業文化発展ニ寄与スルコト絶大ナリ　更ニ又日本山岳会ヲ創設ス　氏ハ子孫ノ為ニ美田ヲ買ハズ依テ氏ノ遺サレタル鴻業隠レタル徳行ヲ区民斉シク敬慕シ茲ニ碑ヲ建テ恩徳ヲ頌ス　昭和三十年六月　深沢学区民三百十五名建之」

高頭仁兵衛義明の祖父義直が植えたという二本の大きなカエデが、夕方の風にそよいでいた。

（一九七六・八・十八）

マナリー峰初登頂(1976年)

増田圭次



はじめに

私たちフーシェ谷踏査隊は、悪天のためにスカルドにフライトすることができず、マッシャブルム西域踏査を断念した。そのため、残されたわずかな日数内で活動できる地域としてスワート山群を選んだ。ガブラル谷を遡行しヒンズーラジのマナリー峰（五六〇八メートル）をアタック、その登頂に成功した。その後、隊員一名が当初予定のフーシェ谷・シンカン谷にはいり、今年度いっぱい調査活動を続行している。

隊員構成

隊長　増田圭次（35歳）東京農大山岳会

隊員　岡林良一（24歳）東京農工大山岳会、元吉仁志（22歳）東京農大山岳会

マネージャー　ノルベット・ファース（30歳）独

ポーター　往七名、復三名　ウトロットポーター

リエゾンオフィサー　マハムッド・アーメッド（27歳）パキスタン陸軍大尉（計画変更のため八月四日解雇）

計画変更に至るまで

先発七月十二日、本隊七月十九日渡行、先発の元吉によって現地での諸手続・下交渉がなされ、七月二十三日からスカルドへのフライト待ちとなる。しかし、八月一日、二十五年来の豪雨となり、スカルドへのフライト条件が悪化、残された行動日数（三十日）等から計画変更の決断をせまれる時となる。そのため、八月三日、パキスタン政府への特別な手続を必要としないスワート山域に計画変更を決定する。翌四日、観光省に於てフーシェ谷踏査をキャンセルし、リエゾン・オフィサーを解雇する。なお、今後の計画について話しあい、スワートのガブラル谷遡行の計画が成立する。

アプローチ

八月五日、隊荷を減量し天候の定まらない中を、チャーター車ワゴンでスワートの州都ミンゴラに向かう。途中マラカンドの道路崩壊のため通行止めとなり、マルダンに引き返す。翌六日、ミンゴラのPTDCでジープ、ポーター雇用の交渉を済ませ、翌日、カラムを経由、ウトロットにはいる。ウトロットで七名のポーターとマネージャー（通訳）を雇用、八月九日、総員十一名でガブラル谷に沿いキャラバンを開始する。十一日ハラハリ谷を遡行して三九七〇メートルの氷河末端にベースキャンプを設営した。

登山活動

マナリアンへの偵察およびルート工作に三日間を費し、増田・岡林の両名でマナリアンへのキャンプ設営にかかる。十五日に四二〇〇メートルのアイスフォール下部に仮キャンプを設営。十六日、四八〇〇メートルのマナリアン付近にアドヴァンスキャンプを設営した。そして、翌日、マナリアン周辺の偵察とマナリー峰へのルート工作を行い、十八日、マナリー峰へのアタックとなる。

ルートをマナリ峰の南面中央リッジに取り五三五〇メートル地点の雪田に出る。引続き軽雪を踏みしめ稜線に向かって直登する。

稜線上は氷まじりの岩稜が続き、頂上直下で氷雪となる。北面に聳える六〇〇〇メートル峰のハラミビットとタロゾムは黒々と氷雪に映え、ヒンズラジの雄姿たるものであった。頂上直下に達した我々は、崩れはじめた天候と高度障害を気にしながらアイゼンを軋ませ一歩一歩頂上に迫った。十四時、ついに氷の頂五六〇八メートルのマナリー峰に立つ。その時、高度計は五七五〇メートルを示していた。時は、十四時三十分、記念に鯉のぼりを残す。写真撮影もそこそこに、スタカットで下降を開始、十八時二十分にアドヴァン

スキャンプに着く。幸いなことに健康を回復した元吉がキャンプ入りしており、三名で初登頂を祝すことができた。

その後天候は急変、絶え間ない落石と雪崩の音に脅かされる。二十日、アドヴァンスキャンプを撤収、ベースキャンプに下る。

八月二十二日、ポーターなしのベースキャンプ撤収となる。三五〇〇メートル地点のスノーブリッジ陥没、苦しい徒渉となる。ハラハリ谷出合でポーター三名を雇用、二十三日四十キロの道のりを一日で下り、ウトロットに無事帰着した。

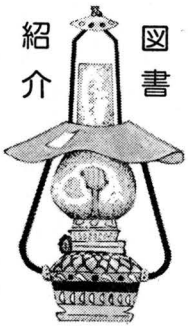
おわりに

ミニ隊によるカラコラムはあまりにも大きかった。三分の一の日数をフライト待ちで費やし、計画変更を余儀なくされ、残された三十日間での活動範囲となってしまった。

幸いにしてヒンズーラジの未踏峰五六〇八メートルの登頂を成し遂げることはできたが、我々の行動は多くの批判を受けるべきものであり、自らを戒め登山のあり方を考えなおしていかなければならないものである。

なお、マナリー峰とは、われわれがマナリアンにちなんで命名したものであり、また、文中に使用した高度は、マナリアン四九二〇メートルを基準にしたものである。

図書紹介



低山高蹤

神谷恭・遺稿と追悼

神谷恭さんは日本山岳会の名誉会員で、長老の一人であった。八十四歳で永眠されるまで、明治、大正、昭和三代に亘り六十年の永い登山歴がある。

『低山高蹤』はご遺族のご熱意と、会員河野幾雄氏のご尽力で、故人の三回忌を前に完成し、本年五月茗渓堂より出版された。神谷さんは生前発表されたものを一冊にまとめて刊行する気持はなく、この本は唯一のものである。

この本の内容は、遺稿として、紀行や随想、親子対談など十七篇、追悼には槇有恒氏ほか十七名の寄稿があり、ご遺族の追憶、河野幾雄氏が神谷さんからじかに聞かれた話をまとめた力作、神谷恭先生小伝、他に年譜山行記録が収められている。

遺稿のうち「川乗山と其の附近」は、大正十五年七月発行の『山岳』に発表されたもので、低山開拓に情熱を燃やした先蹤者の意気込みが感じられる。また神谷さんの山行が初めて記録された記念の紀行文でもある。

「小伝」によれば、この発表について、ご自身の意志からではなく、神谷さんが常に日本の岳聖と仰ぎ敬慕されていた木暮理太郎先生から、再三に亘って催促され、先生直々の依頼状に心を動かされて、やっと筆を取られたという経緯があり、その催促状の写しも添えられて興味深い。河野氏もこの一文こそ最初に川乗山を紹介した貴重な文献だと述べている。

神谷さんは大正十五年四月、当時低山々行にも意欲的な活動をしていた霧の旅会に入会されて、会員とともに、また単独で武、甲、上、相州方面の山々を熱心に歩かれた。「雁ヶ腹摺山より姥子山へ」及び両神山の紀行は、昭和初期に書かれたもので、文章も格調高く、暖かい山人との交情など、よき時代を窺うことが出来る。尚これら山行の秘話、苦心談など河野氏の「小伝」、長男量平氏の後記にも詳しく書かれ興味は尽きない。

神谷さんと言えばすぐお酒を思い出す程、お酒とは縁の深い人であった。随筆の「山と酒」、また寄せられた追悼文にも神谷さんとお酒の話は尽きない。土曜会の神谷バーを思い出される方も多いことと思う。

若い時から苦労された神谷さんも晩年は恵まれて、実業家として成功された。この本には神谷さんの別の面を知って欲しいとのご遺族の願いで、日本経済新聞に寄稿された「工業日本の夜明け前」も収録されている。また次男恭平氏との親子対談は、親子揃って山に魅せられた一家のほほえましい姿が浮きぼりされて、好感のもてる読物となっている。

神谷さんは登山家として地味な道を歩かれたが、その行跡は高く、多くの岳人から愛され親しまれた幸福な人であった。

ぜひ多くの方々に読んでいただきたい。

A5判二五二頁、茗渓堂刊、定価二九〇〇円　（牧野衛）

ヒマラヤ・トレッキング

五百沢智也著

本書が出版されるという話を聞いてから、ずい分と時がたった。ヒマラヤン・ジャーナルの一九七二年版（一九七四年刊）には、既に広告が掲載されているのをみても、刊行がかなり遅れたことを物語っている。このように待望久しかった本書が、本年の五月になってようやく書店に姿を現わした。

定価四八〇〇円、ずい分といい値段の本と思ったが、本書を手にとってみてあっと驚いたのは、私だけではあるまい。およそ過去のガイドブックの概念を破る素晴らしい構成の内容であったからである。これでは時間がかかるのも無理からぬことと感嘆した次第。

本書のカバーには、「手づくりの本格派ヒマラヤン・ジオグラフィー」とうたわれているだけあって、著者が足で実地にたしかめたところを、国土地理院勤務十四年の専門的技術と知識でまとめただけあって、誰にでも真似のできるものではない。このように一九七二年から足かけ五年をかけて、すべてを自身の体験にもとづいてまとめただけあって、正確さが本書の生命でもある。

内容は、第一部「ヒマラヤのトレッキングの基礎知識」、ヒマラヤの周辺の自然と生活をのべ、これからトレッキングに向う人たちにとっての教養編である。

第二部からがトレッキングの案内論で、第二部はネパール・ヒマラヤ、第三部は西ヒマラヤ、第四部が東ヒマラヤで構成され、東はアッサムから西はカシミールに至る全ヒマラヤをカバーしている。第二部のネパール・ヒマラヤが何といっても本書の中心でカトマン

ドゥ、エベレスト山麓、ポカラ周辺、ランタン谷、その他地域としてマナスル三山やカンチェンジュンガ、ガネッシュヒマール、カンジロバヒマール、ダウラギリ南面をもカバーし、最後はタイガートップのコースで終っている。

豊富なカラー写真、スケッチ、詳細な地図、案内図、鳥瞰図……本書はただ眺めているだけでも楽しくなる本で、これを見ているだけでヒマラヤにいきたくなるムードをもっている。

この背景にあるものは、やはり片手間にかいたものでなく、ヒマラヤ氷河研究のために職を捨てフリーになった五百沢氏の情熱である。氏のライフワークの成果を世に問う第一作として、まことにふさわしい内容の書といえる。

ただ残念なことは、これだけの広範なボリュームを二〇七頁に圧縮しただけあって、止むを得ないものとも思われるが、地図が小さすぎて読み難い点である。分冊にしてでもよいからもう少し余裕をもったものにして欲しかったと願うのは私だけではあるまい。

ともかくこれだけの内容のものが四八〇〇円でできたということは、出版社のかなりの犠牲の上にたっているのではなかろうか。著者の熱意と山と渓谷社の理解ある協力、これらが、本書の**随所にに**じみでている。

最後に本書が、広くヒマラヤのトレッカーに読まれること、英語版の出版、そして五百沢氏のご健闘を期待して紹介を終りたい。

B5変形判、二〇七頁、地図、カラー写真、スケッチ多数、一九七六年五月、山と渓谷社発行、定価四八〇〇円。

（松田雄一）

ネパール・パキスタン
ヒマラヤ・トレッキング
ブルーガイド海外版
薬師義美，広島三朗
内田良平ほか著

本書はブルーガイド海外版JALシリーズとして刊行されたヒマラヤ・トレッキングに関する案内書である。

日本人のヒマラヤ・トレッキング熱は、この数年来ブームの状態がつづき、ネパール外務省の発表によれば、観光のためにネパールを訪れる日本人は年間五〇〇〇人を越える程になり、その中のかなりの人がトレッキングに参加している。これだけネパールやパキスタンにトレッカーがでかけていながら昨年までは適当な案内書がなく、断片的に掲載された山岳雑誌の記事をたよりにでかけるより他に方法はなかった。事実日本ネパール協会に対する問合せの大半はトレッキングに関するものであり、そのため日ネ協会では、ガイドブック編集委員会を設けて、これらの希望者の要望に応えるべく現在編集中で、明春に刊行の予定である。

ところが、こうした登山界のニーズを反映してか、ここのところ相次いで四冊のヒマラヤ・トレッカーのためのガイドブックが発行された。即ち五月には五百沢智也氏の『ヒマラヤ・トレッキング』（別記参照）が山と渓谷社から、次いで六月には、栗林一路氏の『ヒマラヤ――遠征・トレッキング入門』が成美堂出版から刊行された。八月には『岩と雪』五〇号の付録として、『ヒマラヤ・トレッキング』が山と渓谷社より刊行され、そして十月にここに紹介する『ネパール・パキスタン――ヒマラヤ・トレッキング』が実業之日本社から刊行された訳である。短期間の間によくも同じような題名の本が出たものである。

この中で五百沢氏のものは、本格的なヒマラヤ・ジオグラフィーと言われるもので、現地へ携行するようなハンディーなものではない。

これに対し、今回のブルーガイ

明治初期の日本における外国人の登山活動について（三）

水野　勉

小林義正氏の『山と書物』には、「ウエストン以前の本邦山岳関係英文図書」という興味ある文章が載っている。そこで小林氏は、J・J・ラインの“Japan; Travel and Researches”という本を紹介している。小林氏も戸惑いを感じられたらしいが、ラインは日本の山岳について書いているのであるが、その本にはライン自身の紀行文がないのである。本の表題が「旅行および調査」となっているのに、ラインという学者は一向に自分の紀行を明らかにしないのである。これはラインがあまりにも学者でありすぎた結果であろうと思う。かれは一八七四年（明治七年）の八月から九月にかけて富士山に登っていて、その記録を書いている（本稿を(一)参照）。しかし、その記録とて紀行部分はほんの少しで、あとはすべて学問的な調査結果を述べているのである。ふしぎな人である。なにかラインの足どりのわかるものがないか――と探していたら、例のドイツの地学雑誌P・Mの第二十五巻（p. 292-297）に“Höhenbestimmungen in Japan während der Jahre 1874 und 1875”という報告が掲載されていた。これとても例にもれず紀行ではないが、日本における測高調査の結果を表にして報告しているのである。

この表によると、ラインは一八七四年の五月から一八七五年の八月にかけて、日本各地、北は秋田、盛岡から南は鹿児島まで歩き回っている。その概略を記すと次のとおりである。

＊一八七四年五月―六月　東海道。東京から京都まで。

＊一八七四年六月―七月　京都から美濃経由で北陸道、北国街道をたどり福井、小松、金沢、高田、長野と出て、中仙道に入って小諸、軽井沢。

＊一八七四年八月―九月　東京から甲府経由で河口湖へ出て富士山を登り御殿場、小田原まで。

＊一八七四年九月―十二月　東京から日光へ向い、そこから会津へ山越えして、若松から米沢へ抜けると福島と下がり、奥州街道を北上して仙台。石巻、釜石、遠野、盛岡とたどって、今度は山を越えて秋田へ抜け、そこから日本海岸に沿って南下し、新潟から三国峠経

ド海外版は、過去のブルーガイド編集の経験から現地で役に立つ内容をコンパクトに収録してあり、きわめて実用的価値が高いものといえる。いわばトレッカー必携書というべき種類のものである。

巻頭には、〝トレッキングの楽しみ〟と題し、辺境の村に入るトレッカーは、村人からみれば一種の侵入者であり、登山者が村人を評価する反面、村人も侵入者を評価している、と書かれているが、このことはトレッカーの心構えとして大切な点である。ヒマラヤのトレッキングの楽しさは、山麓の住民とのかかわりあいにおいて倍加されるものと思われる。

本書は具体的なトレッキング・コースの説明の前に、静かな王国ネパール、ヒマラヤ・トレッキングのアドバイス、トレッキングと高所順応についての説明に多くの頁を費やしている。ヒマラヤのトレッキングで、高所障害による事故がたえないことからみて、トレッカー必読の部分といえる。

カトマンズの案内、クーンブ山群、ランタン山群、アンナプルナ山群についてのコースガイドも詳細な地図とともに最新の状況が記されており参考になる。パキスタンのチトラル、シャンドゥール峠越、フンザ、バルトロ氷河への案内も同様である。

巻末には教養編として、ネパール・パキスタンの自然と文化が収録されており、また巻中に、八千草薫、内田良平、小川信之、松田昭各氏によるエッセイを入れて、単調なムードに変化がつけられている。

B6変型判、三三二頁、カラー写真一二頁他、写真、地図、図版多数、巻末付録としてカトマンズ及びヒマラヤの折込地図。一九七六年十月、実業之日本社発行。定価一三八〇円。

（松田雄一）

山とパイプの人

――藤島さんを追想して――

柿原謙一

藤島敏男さんが他界された。「休山記」が発表されてからも、愛宕山で結構ですよ、いずれ「復山記」を、と願っていただけに、わびしい気持にならざるをえない。増上寺でのお通夜で、藤島さんの法名は「光岳院敏誉紫雲居士」と知った。山に徹した御生涯にふさわしい法名だと直感した。帰宅して伜と話しあっているうちに、これを「テカリ岳藤島パイプ居士」と私案した。

由で高崎まで。

＊一八七五年四月―五月　長崎から佐賀、熊本、島原。また長崎から天草、鹿児島と向い、そこから太平洋岸沿いに宮崎から大分に向い、佐賀関から四国の八幡浜。

＊一八七五年五月　八幡浜から峠を越えて土佐へ出て高知。そこから北上して高松まで。

＊一八七五年六月　高野山から吉野、伊勢。そこから戻って奈良まで。

＊一八七五年七月―八月　高崎から中仙道をたどって和田峠経由で諏訪へ出て、更に木曽谷に入って名古屋へ出る。

右のとおり、ラインは精力的に日本各地を旅行している。この間に近くの山々を登っている。富士山、御岳、白山、浅間山、男体山、高千穂などの山である。ラインは広く日本を調査するのが目的であったから、右のような有名な山は登ったが、脇道へそれて山岳地帯に入りこむことはしなかったので、ガウランドやアトキンソン、クニッピングなどとはちがって、新しい山岳知識をもたらさなかった。しかし、そのルートのすべてにわたって測高しているのにはおどろく。またその業績が一八七四年、七五年という早期である点でも目立つのである。富士山を除いたら、御岳にしても白山にしても浅間山にしても、外国人としては最初の登山ではないかと思う。また山ばかりでなく、ラインはこの旅行において山地の峠をかなり越えているが、これも外国人としては最初ではなかろうか。いまのところ、ライン以前に他の外国人が日本の辺境の地を訪れ、峠越えなどをした記録には接していないのである。もっとも、北海道については、ライマン、ワトソン、ブラキストンその他の旅行があるが、むしろ本州については東海道とか中仙道以外には記録が見当らない。一八七一年にトロープという人が、越後、越中、加賀、能登と旅行した紀行があるが、ルートをたどってみると、山地には入っていない。

とにかく、J・J・ラインの旅行および登山は、外国人としては、その早期な点で目立つのである。

ライン以後になると、外国人の旅行がさかんになり、日本全体にわたって多くの外国人が旅行するようになる。㈢で述べたクニッピングもその一人で一八七五年には大峰山を訪れている。一八七六年にはウェイコフの全国旅行が行われている。この旅行の足跡は全くおどろくべきである。北は北海道、青森、南は鹿児島まで、ラインよりもはるかに広い地域を旅行している。また同じ年にE・R・クルックが中仙道をすべて自分の足で歩いている。その他多くの外国人が精力的に日本を知るために広く歩き回っている。このようなエネルギーはいったいどこから出てくるのであろうか。単なる趣味や楽しみとはどうしても思えないのである。ウエストンあたりになるとはっきりと楽しみが前面に出てくるが、この明治十年以前の旅行はいささかちがう。きちがいじみていると思われるぐらいに、かれらはあちこちと歩き回る。ラインなどは学者だったからその上に科学的調査をおこなっているし、クニッピングはりっぱな二十五万分の一地図さえ作っている。知ろうとする意欲だけから、かれらは辛い、困難な旅行を敢てしたのだろうか。この辺のことになるとどうにもわからないのである。

いままでのところでは、フランス人の行動がわかっていないし、有名なガウランドの記録さえ明確でないから、明治初期における外国人の登山活動については、殆んど解明されていないといってよい。今後とも折にふれて調べていきたいと思っているので、お気づきの点があったら御教示いただきたいと思う。

著書『山に忘れたパイプ』の登山譜では、藤島さんは光岳には登られていない。一九六八年正月の下栗―御池山往復―程野―地蔵峠行で、聖岳から南に光岳は見えなかったろうか。いつだったか光岳はテカリと読むのだよと言われたのを想うと、登りたい山だったのではないか。紫雲居士となるとまず山頂の眺めだが、くゆらすパイプの紫煙でもあり、どうやら二つの意味がある。病室でお目にかかったときもパイプは枕辺に鎮座していたし、紫雲をふかすのでJACの青年が天井の火災探知器にうすいビニールで蓋をしたというエピソード付きだった。

とにもかくにも山とパイプをあの世まで持ちこまれた。にぎやかな法名だと思う。御葬儀の祭壇には、俄然パイプ片手に藤島さんの遺影が笑みをたたえていた。

わたしが藤島さんの名前を知ったのは、「山と渓谷」二号を古本屋で求めた頃で、もう四十年も前のこと。これに随想「山に忘れたパイプ」が載っていたからである。山行をともにしたのは一九六六年の甲武信岳で、パイプの本格的な吸いかたを親切に教示してくれたのは一九七一年一月の滝子山行のときであった。わたしの自己流パイプふかしは、正統派となるのに三十五年もたっている。

じらい山岳書をよむおりにパイプの話がでてくるとメモしておいた。たまったところで大兄とのパイプ談資料にしたいと思って。

スマイスのKAMET CONQUERED に頂上での隊員ホールズウォースについての記述――As we lay in the snow, Holdsworth smoked half a pipe. We had often chaffed him for his pipe, but we could scarcely do so after this. Whether or not he enjoyed smoking a pipe at 25,447 feet is another matter. At all events, this offering to the Goddes Nicotine deserves to be recorded.

――が、藤島さんの著書一六頁で、「これは恐らく人類が大地をふんでパイプをくゆらした最高の記録だとおもう。僕のパイプ・スモーキングはマッターホルンの頂上、四五〇五メートルが一番高い」という表現となったのだろう。

ウィルスのウェターホルン登攀記には、ガイドのボーレンが氷河のふもとに着いてからパイプをくゆらし、and set off again, smoking like a chimney-pot. という記述があり、面目躍るごとしと思った。ウィンパーの "SCRAMBLES" 一九六六年版をみて、パイプを咥えたガイドのクロスの版画や二五一頁脚注にあるクロスとメイメやウィンパーのパイプとシガーの気楽なやりとりには、やがて訪れる栄光と遭難を対比せざるをえなかった。

ところでいま読んでいるマンメリーでは、ツムット稜登攀の難所でガイドのブルゲナーが愛用パイプを失う――Suddenly a splinter of rock caught his coat, and an agonised yell told us that his pipe, his faithful Companion in many a hard-fought climb, and the gift of his most trusted Herr, had been jerked out of his pocket and plunged down to the Matterhorn Glaicier.――とあり、ついで難所をぬけたブルゲナーが叫ぶ、「パイプが仇を報じてくれる。頂上登攀間違いなし」と。これはパイプの効用というべきか。

さてこれらのメモがあっても、藤島さんと山とパイプの清談をする機会はもう失せた。ドシドシ書いて『山』に投稿しなさいといわれていたのだから、これもそういたしましょう。藤島さんにはあの世で読んでいただくほか手がない。

つつしんで親切だった山とパイプの藤島さんを深悼する。

一九七六・一〇・二四

足立源一郎さんの想い出

月原俊二

会報三一五号にパイプの愚稿を寄せたことがありまして、藤島さんから誤っていた点をお便り下さったりして恐縮していました。稿中に春陽会の故足立源一郎画伯のことも、パイプには因縁深いものがあったので記述していました。

足立先生が亡くなられてもう七年ぐらい経つと思います（この点どうもはっきりしないで恐縮に思っています）どうも先生は未だ生存されているような錯覚さえあるおろしている。多くの人が一泊山行で清掃登山に参加している様子に感心した。聞くところによると、山のゴミ一掃の運動を始めた当時は、県、市町村等の協力は得られず、たいへんだったそうだが、昨今では、各自治体の積極的な協力が得られるまでになっているという。すばらしいことだ。

大阪からは51年10月の清掃ハイクについて、斧田氏と三上が報告した。新潟の動員力には

・自然保護情報・

冬山登山のゴミが山を汚す

――自然保護委員会第2回上高地集会に出席して――

三上博民

10月30日、31日と上高地にて開かれた自然保護委員会に初めて出席した。

処理したゴミが三〇トン

自然保護委員会の本年度活動方針のゴミ問題について、新潟、大阪の二地域での清掃登山や清掃ハイクの報告があった。新潟での清掃登山の中で、50年9月谷川連峰清掃登山と51年9月の苗場山清掃登山の模様を16ミリフィルムで見せてもらった。この二回だけでも延べ参加人員は七〇〇人を越え、処理したゴミの量も三〇トンになる。これら大量のゴミは、自衛隊の大型ヘリコプターを動員して山上より

のです。

先生との出会いは昭和十二年でした。日支事変で出征でごったがえしていたし、不況もつのるばかりの頃でした。

故橋本三八氏（八幡製鉄所山岳部リーダー）、故加藤数功氏（九州山岳連盟創設者）などとのつながりもあって、小倉市（現北九州市小倉区）随一のデパート井筒屋で個展即売会を開かれるについて、出足の都合の良い拙宅を訪ずれ、会期中何かと世話して欲しいとのことでこころよくお請けした。その折、午前の一時間程を割いて私の肖像画を画いてあげるとの申し出があり、まことに心嬉しく光栄の至りであった。井筒屋前の旅館に時間通りに出向いて、三日がかりで画いて貰った。十号人体とかで立派な額まで付けて下さった。当時三十歳で、幸山荘という山とスキー具専門店を開いて五年目の春であって、口ひげを蓄え、いかにも悪そうな面構え、ポーズは七三のプロフィルに愛用のマドロス片手（同掲写真）、g. adachi, 1937のサイン入りで、自分は山が主体で人体はこれで三、四人目で、あとも人物は画きたくないと申されていたことを覚えている。

その絵を不覚にも素人の浅間しさで手入法も知らず、なおまた、大雨の折雨もれで裏面キャンバス地をぬらしていることに気付かずにいたところ、表面の油絵具が剝げてきたのに驚ろき、せめてカラー写真に収めておこうと撮影したものがこれであって、カット代りに同封した始末です。

先生と山行も共にしました。井筒屋展が終って、福岡県下の名山英彦山（ひこさん）に案内かたがた山頂を踏みましたが、その節は油絵具は携行されず、盛んに独特の画帖にスケッチされていました。

九重山にも二度程お供しました。主に北の飯田高原で本式に脚を立てキャンバスに向っていられました。先生のスケッチの間、私も門前の小僧で集印帖（鳥の子紙がよろしいと言われていたので用意していた）に、見真似もの真似で頁を繰って、横に長くなる山の連峰をパノラマ式に画いてみた。先生は山宿に帰って直ぐ今日の山色を絵具で採色されていた。自分の山日記であって、今迄の山行は総てスケッチブックを開けば、その日、その行の回想が蘇ってくると言っておられた。

生粋の江戸っ子弁で、声高らかに歯切れよく、先生の話は尽きるところがなかったし、その話術に引きずり込まれていた。

当時私に贈られたマドロスパイプの掃除金具は、未だに大切にし役に立てさせて貰っている。

小柄であったが剽悍な先生の面影がハーフエンドハーフの紫煙の中に未だにはっきり浮かぶのである。

・自然保護情報・

・自然保護情報・

・自然保護情報・

及ぶべくもないが、前日来の大雨にもめげず、一八〇人近くの人が四地域にわかれ、清掃を行なった。大阪近郊の山は、一般ハイカーも多く、清掃を行なっているすぐ横でゴミを捨てていく人が多いことも報告された。これは後の討論の時にも議論されたことだが、一般の人の多くは、山屋さんも含めて、山の中でゴミがたまっているところはゴミ捨て場だと思っている。ゴミ捨て場だったら、山で出たゴミはそこで捨ててもいいじゃないかという論理になってくる。この論理を破るには、山のゴミをなくすためにくり返し山の清掃をやり、ゴミ持ち帰り運動をもっと強力に促進させる必要があると思う。

新潟の人が清掃登山について「東京の人にもっと理解して協力してほしい」といっていた。山を一番汚しているのは山屋であるといわれているし、北アルプスへ行くとなるほどと思う。また、山屋の多くは都会の人間である。ごく近代化（？）された便利な町に住んでいる者は、つい町の生活を山に持ちこんでしまう。ゴミや不用品はポリ袋やダンボールに入れて家の外に出しておけば、役所の清掃車が運んでいってくれる。もちろん、これにもルールがあり、指定されたゴミ集積所へ持っていかないと、清掃車も処理してくれない。テントの中だけきれいにして、ゴミや不用品は外の雪にでも埋めておけばいいだろうと考えた結果が、雪解け後のテント場のゴミの山となってあらわれている。私を含めて、都会に住んでいる者に、ゴミ持帰りの自覚が必要と思う。

林道の延長と盗伐

ゴミ問題以外に、次の二点が問題提起された。まず最初は、奈良の田村氏から大峰、大台ガ原の林道建設に伴う諸問題。林道建設中に、削りとった土砂を谷に落とすため、原生林が死んだり、大峰でも有数の谷が埋没してしまっている様子を8ミリで見た。林道建設もさることながら、林道建設による自然破壊のはなはだしさに憤りを感じた。いったん林道ができあがると、いつのまにか観光道路化したり、次の問題にあるように盗木の運搬道となったり、崩壊、補修のくり返しで、いよいよ山を崩していったりする場合が多い。一般の人が知らないところで、いつの間にか自然が破壊されていっていることの重要さを認識する必要があると思う。

次に横浜の葛貫氏から花木の問題が提供された。このまま花木の盗木が進めば、近い将来、日本の山から花木に使うような木はなくなってしまうそうである。国立公園や国定公園の深い山の奥にしかありえないような木々が町の中に飾られている。業者が日本の山のいたるところにはりめぐらされた林道を利用して奥地へはいり、採ることを許されるはずのない木を盗り、町へ売りさばいているそうだ。需要があるから業者も供給せざるをえなくなり、山から花木を盗んでくることになるのであろう。花木を要求する側の人は、山でゴミがいつのまにかたまったゴミ捨て場にゴミを捨てる人と同様、彼らのやっていることが自然を壊していることに気づいていないから始末に悪い。この件については、ゴミ問題とは違った啓蒙活動が必要である。

31日、雪の降る中、岳沢小屋まで登った。岳沢は、もう雪をかぶり、まさにクリーンそのものだった。その雪の下にゴミがあるのかないのか、あるいは今後降る雪の中にゴミが埋められるのかは、来年の6月ごろ、またこの岳沢へくればわかるだろう。

＜出席者＞織内、山本、池田、和田、武田、猪俣、藤田英、藤田力、田村、斧田、三上、葛貫、荒木。

山を歩く

祝瓶山

高橋憲二

朝日連峰の主峰大朝日岳に立って西南方を望むと、平岩山を経て切立った三角錐の岩峰祝瓶山（標高一四一七メートル）が望まれる。晩秋の十月二十六日、宮城支部の一行十名は仙台より長蛇車を連ねて、山形県西置賜の長井市に至り、三十キロの山道を木地山ダムを経て祝瓶山荘に入った。

翌日は未明の出発で野川にかかる。こわれかけた吊橋を渡り、桑住平を経て未だ明けやらぬ西の沢を徒渉し、ヌルミ沢にて朝食とした。水を充分に補給して急な等高線尾根にとりつき、暗い濶葉樹の原生林に入る。両手を使って潅木や露岩に縋る急登急降の尾根をへずり、二時間を費して森林限界の稜線に出た。道は花崗岩の岩礫地帯になり、濶葉樹林の紅葉が素晴しく全山これ錦繡の坩堝（るつぼ）とでもいうか、急な登りではあるが、踏跡は固い花崗岩のため非常に歩きやすい道である。絶えず右手に、紫色に烟る朝日連峰の主稜を眺め、左手は木地山ダムを距てて、長井、米沢盆地が霞の中に光るのを眺めながらの急登である。

正面に見あげる、祝瓶の頂上周辺は、草紅葉と急崖に囲まれ、青灰色の岩溝が幾条となく沢にずり落ちている。潅木がおい茂る平坦な岩礫地に出て、あと一息というところで、予想もしなかった草付の急なスラブ状の一枚岩にぶつかる。頂上まで一〇〇メートルぐらいの悪場の急斜面である。足下を俯瞰すれば、斜度五十度に近く、四〇〇メートルの急崖が沢に落ちこんでいる。足がすくみ、思わず息をのむ瞬間であった。

恐ろしい悪場もなんとかへつり終えて、ようやく涼風吹きあげる山頂にたどりついた。わずか一四一七メートルの低山とは思えぬ豪快な山である。絶えざるへつりと急登に、思いがけなく四時間の時間を要した。

山頂からは、素晴らしい三六〇度の展望である。紙屑一枚落ちていない綺麗な約一〇メートル四方の狭い二等三角点のある岩礫地である。大朝日岳は指呼の中にあり、朝日連峰は美事な草紅葉にいろどられた稜線を静かに西北につらねている。西朝日岳、袖朝日岳は主稜をはずれて、西南面に堂々と肩を張っている。荒川渓谷は、朝日連峰の中で最も顕著な雪蝕地形であり、花崗岩の灰白色の岩肌を見せて、荒川本谷に一気に高度差一〇〇〇メートルで落ちこんでいる。連峰屈指の困難な沢を擁し、約三キロに沿って数百メートルの側壁をつらね、豪壮な連峰の一面を誇示している。

眼を西南の新潟県境に転ずると、幾重にも重なる低い山並みを越して、飯豊連峰の長大な山並みが眺められ、来し方、私が遊んだ石転び沢の雪渓の登り、北股岳、梅花皮岳、とおぼしきあたりが望まれる。いずれも紫色に烟り、初雪もま近な晩秋のたたずまいを見せている。東南には、磐梯山、吾妻の連山が霞の中にひっそりと浮かんでいる。

恵まれた快晴に感謝して、一時間ほど素晴らしい眺望に名残りを惜しんで、頂上を西に降る。細い岩稜の急な尾根道は、荒川谷の針生平を経て、徳網より小国に下る古い道である。急降二〇〇メートルのあたりで、右に急角度に曲るやせ尾根は、大玉山から大朝日岳に至る道である。ひんぱんな登下降をくり返し、うるさい潅木をからんで、約二キロほどで赤鼻分岐に着く。これより赤鼻尾根のゆるやかな下り道を、右手に西の沢の沢音をきき、午後の日射しに日蔭になり黒々とそびえ立つ豪壮な祝瓶の北面を見あげながら、ゆっくりと下り、朝方辿った桑住平の分岐にたどりつく。奥深い東北の山で、未だ広く知られていない祝瓶山は、永く思い出に残る山であろう。老いの私にとっては数少ない貴重なる山行となり、晴れた一日の楽しかった山旅を満喫して帰路についた。

茨木猪之吉画伯を しのぶ会

本会々員、日本山岳画協会創立会員の茨木さんは昭和十九年十月二日北アルプス穂高岳で消息をたたれ、今年で早くも三十三回忌を迎えることをおききし、十月二日、故人のお知りあいの方々と思い出会を横浜市の久保山墓地「かるべ茶屋」で、小雨降る墓前での法事を行った後、ひらきました。

会場には「故人以上によくにている」といわれる、例のブロンズ（佐藤玄々作）が飾られ、長男岳人君のあいさつの後、参会者がこもごも故人の思い出を語られました。吉沢さんの『山旅の素描』（生前の著）の編集ばなし、交野さんのウエストンのレリーフ運びおろしのお話、その他なつかしい話ばかりでしたが、どなたも最後にはお酒の話が出ますので、そのたびに一同「そうなんだよ」というわ

売場ご案内

最新入荷の本

✠尾瀬の自然観察（日本自然保護協会）250円
✠岩燕Ⅵ（麻布学園山岳部）3,600円✠怪峰ジャヌーからの報告1976（山岳同志会）1,250円
✠ダウラギリⅥ1970年ヒマラヤ登山報告書（関西登高会）2,200円✠青と白の厳しさ DAULA-GIRI-Ⅳ1972（群馬県ヒマラヤ登山隊）2,400円✠野口雅光君谷川岳遭難報告書（あすなろ山岳会）1,250円
✠わたしの草と木の絵本（坂本直行）1,200円
✠エーデルワイスの詩（坂倉登喜子）2,400円

特製本在庫ご案内（お求めは直接お茶の水店へ）
✠坂本直行画文集◀雪原の足あと▶25,000円
—原画　花の絵（淡彩2号）付—
✠望月達夫◀遠い山近い山▶19,000円
✠藤島敏男◀山に忘れたパイプ▶19,000円

茗溪堂　〈山の本の売場〉お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

けなのです。ともかく、三時から七時まで、ゆっくり語りつづけました。

参会の方々は未亡人の姉大野英子、長男茨木岳人、長女荻野富士子、次女横山駒子、三田幸夫、野口末延、島田巽、吉沢一郎、交野武一、望月達夫、川崎吉蔵、小野幸、故人のお弟子吉村唯七画伯夫妻、徒歩渓流会杉本光作などの諸氏でありました。

（小野　幸）

スイス山岳会長 オットーメイヤー氏との思わぬ会見

早乙女緩次

八月十日午後五時、私はルツェルンのスイス山岳会クラブで、会長のドクター・オットーメイヤー氏と会う機会に恵まれた。

それというのも、一昨年『スイス・ベルナーアルプスの岩場』を翻訳出版した会員岡沢祐吉、赤沼八隅両君とは少年時代からの友人の故をもってなのである。

今年のウエストン祭は雨に見舞われ、宿での語らいは、幸いなことにスイス行きの計画に終始した。

航空便等の手配は総て赤沼君がやってくれたので、私は小林俊樹君と事前に北穂・奥穂・前穂の縦走を行ない、体調を整え七月三十一日一足先に出掛けて、西ドイツ・オーストリーを回り、フルチゲンの宿で後発の岡沢君の到着を待った。約束の日の夜、彼は扁桃腺をはらして到着、そのままベッドに伏してしまった。

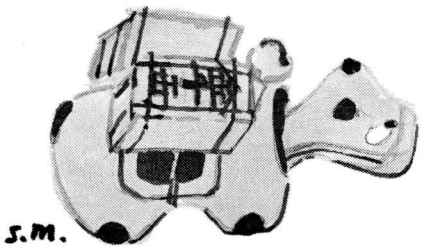
岡沢君の今回のスイス行きの目的の中には、ドクター・オットーメイヤー氏との会見、当地で弁護士をしている山の友人との再会、グリンデルヴァルトでの墓参（田口一郎氏の墓）、友人の開拓したというヴァリスアルプス・ヴァイスミース北稜登行等々などがあった。

翌日になって彼の体温は三十九度を越えて、頭と喉を冷し続け、医師からは安静を命じられてしまった。

この日、私は前回の旅行の折見損なってしまったベルン山岳博物館を訪ねていたのであるが、翌日の岡沢君とドクター・オットーメイヤー氏との会見がどうなるのだろうと、心配しながら宿に帰ってみると、数日前、ユング・フラウのコルの避難小屋で会った会員小野有伍君が、その後ミューレンの村からゼヒネン→キーンタールと入り、幕営生活をしながら、私どもの定宿を訪ねて来てくれていたのである。彼は、筑波大学地球科学系の研究者であるが、目下フランスに留学中で、既にピレネー山脈を踏査し、ちょうどベルナー・オーバーランドの氷河地帯の調査の為に単身歩き続けていたのであるが、離日前に岡沢君等の訳本を読破して来たので大変助かったというのである。

岡沢君の代理として、ドクター・オットーメイヤー氏と会見する破目になっていた私の通訳を小野君が快く引受けてくれた。

ドクター・オットーメイヤー氏は、時計の針のように正確に午後五時に現れた。中肉・中背の気さくな紳士で、フランス語・ドイツ語・英語を使い分けて、六十五歳の年令を感じさせない好人物であった。大変に流暢な小野君のフランス語に気を良くして、会長はしゃべりまくった。岡沢君の容体を大変心配してくれると同時に、『スイス・ベルナーアルプスの岩場』の翻訳の業績を高く評価してくれている一人として、翻訳中から、訳本のスイスでの販売を強く推進していたのである。



カット／松本慎太郎

昨今の日本人登山者の中で、無法者の多いことに対しての警告と批判は勿論のこと、ごみ処理問題に至っては'Nein-nicht so.'と書かれたスイス山岳会配布のタブロイト版のポスターを私に示しながら痛烈であったのには恐縮した。

会見が終る頃には、ルツェルン名物の雨も降り出し、会長は、私どもの帰路の心配もしてくれて、時刻表から列車の接続をメモに取ってくれたり、クラブの女性職員が帰ったあとの片づけ等も自から行ない、自家用車で市内案内をしてくれたあと、会の図書委員長宅まで送りとどけてくれた。

岡沢君の容体も回復し、小野君はシャモニ針峰群の調査活動に出掛け、私どもは八月中旬無事帰朝したが、数日後の新聞紙上でマッキンレー山脈に於ける「ゴミ」の問題記事を拝見し、私はこの一文を寄せたくなった次第である。

（五一年八月二一日記）

第一回山岳画展

図書委員会主催

さきにご案内いたしました第一回山岳画展を、左記のとおり開催いたします。ふるってご参加ください。

なお、出品者への案内説明書は追ってお送りいたしますので、出品ご希望の方は図書委員会までご一報ください。出品は油絵、水彩画、水墨画、版画、スケッチに限ります。

記

日時　昭和五十二年二月二十八日～三月五日（六日間）

場所　東京・日本橋　丸善画廊

出品申込み締切日　昭和五十二年二月一日

備考　山岳画即売展とします。価格は、専門画家については、市場価格を尊重する原則で設定し、一般会員の出品については号数別一率価格を設定する方向で検討中です。いずれにいたしましても、価格については、当委員会に一任願います。

以上

「秋の味覚と秘められた温泉」を語る座談会

三水会報告

十月の三水会は去る十月二十七日、「秋の味覚と秘められた温泉」をテーマとして、座談会形式で皆さんからお話を聞いた。

今回係の片岡氏からまず秋の味覚の第一は、東北の山形で「もってのほか」といわれて名物となっている紫紅色の菊であるということで、実物と熱湯でさっとゆでて酢のものにしたものに、カボスという果実（レモンの代用）の汁をかけて食べるものと、ゆでてしょうゆをかけて食べるものとを持参され、皆で試食させていただいた。その他きのこの王様まいたけや、かのこ、すぎもたせなど奥様が味つけされたものなどを、あんにんこ酒のおさかなとして賞味し、一同頬を赤らめながら、秋の味覚について語りあった。

秘められた温泉については、長い間各温泉を探診されてきた今井喜美子さんに、現代の秘境としてとり残されている青荷温泉や大平温泉などのお話を聞き、次々と皆さんから各地の秘められた温泉の話から、混浴の話になるや、笑い涙をこぼす人も出て、さすが中年層会員の集いらしく、味と秘境の座談会は楽しい雰囲気に盛り上り話はつきなかった。

来年は是非秘められた温泉へ順次訪れて現地三水会を係回り持ちで催そうではないかという話もでて、折井さんからは上高地の山研でもやろうということになった。

なお当夜来室中の韓国山岳会の三人の若い会員も関口さんの紹介で同席され、二人は来年計画のアンナプルナ偵察後、日本に立ちよって北穂に登った帰途、日本に留学中の崔さんと一緒に日本山岳会ルームへこられたとのことだった。

その内の一人が胸につけていたバッジが偶然にもエーデルワイスだったので、韓国にも花の咲く山のあることを聞き、日本の山の感想なども話され思わぬ親善と交歓のできたことを喜びあい、最後に今井喜美子さんより、坂倉著「エーデルワイスの詩（うた）」出版記念会を来る十一月二十四日、如水会館で催す旨の予告があって、午後八時半ごろ座談会を終了した。

（坂倉登喜子）

出席者

片岡博、今井喜美子、折井健一、沼倉寛二郎、中島伊平、中川恵資、網倉志朗、進藤波男、関口周也、崔泳喆、前炳九、金鐘郁（韓国山岳会三名）、高田真哉、堀内章雄、勝田房治、杉山都子、斎藤桂、坂倉登喜子、計十八名（順不同）

マウント・アサバスカ 3436メートルへ

会報7月号に記載された、カナディアン・ロッキーツアー9日間に参加しました。

バンフ・ジャスパーナショナルパークの限りない広がりは、大自然というよび名からもはみ出しそうなほどでした。

とりわけコロンビア・アイスフィールドからお目当のマウント・アサバスカに登頂できたことは最高の喜びでした。

8月10日、当日は現地のクライマーも引返すくらいの悪条件でした。連日の雨で雪がゆるみ危険な状態だったので、ルートを変え、ザイルパーティを三つにわけて黒川氏ほか2名の的確なリードにより、全員12名登頂することができました。

みごとなアイスフォールに目をみはり、クレバスと落石に肝を冷やしながらも天候恢復はラッキーでした。

頂上では、日本国旗とカナダ旗をピッケルにつけてかざし、ヒマラヤなみのオーバーな感動でした。

目をやれば純白のアンドロメダやスノー・ドームにも陽光きらめき、ロッキーの氷河のスケールの大きさをほしいままにしました。

マウント・アサバスカは、日本人は過去4登くらいとか、カナダのパークワーデンも、12名全員登頂に驚いていた。

（柴田初子）

上条孫人君

昭和十年前後、島々の山案内人として知られた同君は、一九七六年七月十三日病歿した。嘉門次の孫にあたる。生年は一九一〇年二月二十四日、享年六十六歳。中年以降は病気がちで不遇の半生だったが、嗣子輝夫君が現在嘉門次小舎を営んでいる。

（望月達夫）

会務報告

11月理事会

（11月5日午後6時30分　本会ルーム）

▽出席者　今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、小倉、皆川、黒石、田村俊、橋本、浜口各理事、小原、佐藤、浜野、折井、宮下各評議員

委任　神崎、原、浅田各理事

▽議案

・ルーム小委員会メンバーについて　（望月）

委員長（望月副会長）に一任　了承

・UIAAの執行委員会委員推薦について　（佐藤）

討検の結果、日本の委員として佐藤テル氏を推薦　承認

▽報告事項

・UIAA総会出席報告（佐藤）

・ナンダ・デヴィ隊の記録映画が隊より寄贈　（浜野）

・学生部

ドゥナギリ峰登頂に成功　（皆川）

・山日記

発行がやや遅れる　（橋本）

・青年懇談会

中国との登山交流について文書を会長名で出す　了承

・高所登山　（田村俊）

「ヒマラヤ研究2」来春出版予定

・集会　（田村俊）

今後の行事予定

＊　＊　＊

ルーム日誌（51年12月）

1日（金）指導委員会
4日（月）集会委員会
5日（火）第三四三回小集会「各国山岳会情報」
6日（水）山研委員会、自然保護委員会
7日（木）図書委員会
8日（金）理事会
13日（水）書評委員会、財務委員会
18日（月）集会委員会、青年懇談会
19日（火）図書委員会
20日（水）第三四五回小集会「会員会議」
21日（木）雪崩研究会
22日（金）常務理事会
23日（土）第九回図書交換会
25日（月）第三四六回小集会「ローツェ報告会」
26日（火）自然保護委員会
27日（水）三水会

今月の来室者四四七名

会員異動（51年10月）

物故者

一四八七　酒戸　弥二郎（51・10・5）
七七六八　武井　栄四郎（51・10・3）

除籍取消

五九六〇　久保　治紀
七六七六　小柳　せい子

終身会員

一六二四　藤沢　乙三（51・10・6）

退会者

六一六四　内田　嘉弘（51・10・15）

支部変更

五七二三　宮森　常雄　福島支部
六五九九　三枝　明徳　東京

昭和五十一年十二月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西錦司
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

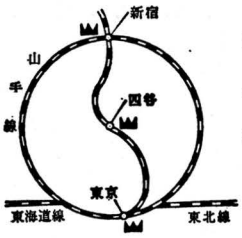
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3－5－7　(561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座3－4－6　(561)0966　スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目4－7　(364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4　(28) 3440

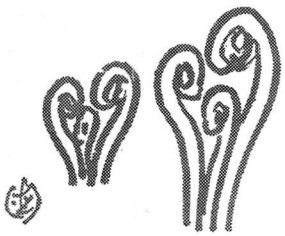
山の本

新刊

わたしの草と木の絵本

坂本直行

B五変型判一四〇頁
定価一二〇〇円



この本は創刊二百号を迎えた十勝の児童詩誌「サイロ」の表紙絵を描き続けてきた直行さんが、その詩情豊かな数々の素描の中から、山の草・野の草18点、山の木・野の木12点、高山の草20点、高山の木8点を選びまとめたもの。素朴な子供の詩心をそっとくみとった美しいスケッチからは、土のにおいが漂ってくるようで、絵に添えられた説明文にも、こよなく自然を愛する直行さんの心情がにじみでている楽しい絵本。

山日記 一九七七年版

日本山岳会編　A六ポケット判　定価九五〇円

七七年版が発行されました。プレゼントカードがついていますので、しゃれた贈物として是非ご利用下さい。

●登山のために　山日記をつけよう……望月達夫／山の装備……堀田弘司／山の気象……大井正一／山の医療……浜口欣一・横山誠之

●登山便覧　山小屋一覧／登山行程表／交通機関連絡先一覧／日本の山／難読山名／日本三百名山(案)／登山地図・案内書／五万分の一・二十万分の一地形図一覧／剣岳と谷川岳の登山規制条例／山岳保険について／日本山岳会本部支部一覧

●出版目録送呈
●お買上げ、ご注文は最寄り書店でどうぞ！　茗溪堂　〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1　電話03-291-9442 振替東京 8-24723